

令和 6 年度 東京藝術大学 未来創造継承センター 芸術資源活用プロジェクト 実績報告書

※Word ファイルで提出してください。

プロジェクトの タイトル	表現と損傷の境界－現代美術の保存に関する研究	
実施責任者 (申請代表者)	氏名	所属／学年／役職 (所属がない方は未記入)
	松永亮太	甲南女子大学 講師 (特任)
実施期間	2024 年 4 月 1 日 ～ 2025 年 3 月 31 日	
実施内容 ※申請書の「プロジェクトの概要」や「実施計画・方法」に記載した内容について、実際にどのようなことを実施したのかについて記載。 (500～600 字)	本プロジェクトは、現代美術作品の保存において、どこまでが「表現」であり、どこからが「損傷」なのか、その境界を探ることを目的とし、申請書に記載した通り現代アーティストと美術館、それぞれの視点から見た表現と損傷の境界についてインタビューを中心に調査を実施した。特に、本課題の起点となった小林正人《自画像》(1984 年、東京藝術大学蔵)を軸に調査を進めた。作者本人に制作当初の状態ならびに自作における境界認識についてインタビューを行い、同作家の作品を取り扱う東京国立近代美術館と東京都現代美術館のコレクション担当学芸員に対しては作品の取り扱いや保存方針についてヒアリングを実施した(報告書資料 1、2、5)。これらのインタビューと並行して、小林正人氏の画業を振り返るトークイベントへの参加や、過去の展覧会図録、新たに刊行された画集等の文献調査を実施するなど、小林氏の作品における作品の境界認識について多角的に調査した。また、東京藝術大学の自画像コレクションを複数点閲覧し、物理的な損傷と言える状態が含まれている作品の作者へのインタビューを通してアーティストの視点からの境界認識を調査した。(報告書資料 3、4 参照)。	
実績報告 ※プロジェクトを通じてどのような成果を得ることができたのかについて具体的に記載。 (500～600 字) ※別途、プロジェクトの実施状況や成果が分かるものを画像ファイルもご提出ください。 (必須)	本プロジェクトでは、小林正人氏が自ら破いた《自画像》の穴が、第三者によって“補修”されていたことを起点として、「表現」と「損傷」の誤った境界認識が、汚れ、色褪せ、亀裂や折れなど、物理的損傷と捉えられる状態を含むすべての作品に起こりうるのではないかという問題を提起した。そこでアーティストと美術館それぞれにおける表現の境界を探るためにインタビュー調査を実施した。結果として、アーティストにとって表現の境界は流動的なものであると同時に作品として成立しない「損傷」という境界もまた存在していることが分かった(報告書資料 3、4、5 参照)。一方、美術館は原則として作品の完成あるいは収蔵当初の状態を「表現」の境界と捉える傾向があり、近代的な作品観による境界認識に基づいていることが分かった(報告書資料 1、2 参照)。 以上の調査を通して、アーティストや個別の作品には流動的な異なる境界があるものの、美術館という制度の上では固定的な境界が与えられており、境界認識にずれが生じていることが明らかとなった。ただし、美術館の制度的性質を原則としつつも、現場で作品を扱う学芸員は流動的な境界を意識する姿勢も見られた。 本プロジェクトは現代美術に適した保存のあり方と美術館のこれからを考えるための基礎調査として位置付け、今後は保存の本質的課題である「作品」と「非作品」の境界判断へと研究を発展させていく。	

※本様式に加え、補足資料として PDF ファイルや音声データ、映像データ等の提出も可。(必須ではありません)